

(様式 12)

氏名(本籍) 鈴木 達也(埼玉県)
学位の種類 博士(歯学)
学位記番号 甲 第344号
学位授与日 2017年3月15日
学位授与の要件 博士の学位論文提出者(学位規程第11条第1項該当者)
学位論文題目 「CBCTを用いた下顎切歯管の成長発育に対する周囲組織の影響」

論文審査委員 (主査)教授 奥村 泰彦
(副査)教授 村本 和世
(副査)教授 渡部 茂
(副査)教授 坂 英樹

論文内容の要旨

下顎管はオトガイ孔で下顎骨外に開口しているが、オトガイ孔よりも前歯部方向にも走行が継続していることが知られている。オトガイ孔以後は切歯管と呼ばれ、舌孔に達するとされているが報告が少ない。そこで切歯管について画像解析により研究を行った。切歯管の成長・発育に伴う面積と長さ、顎骨との関係の変化について解析を行った。Hellman 歯齢 IA~VA 期と VA 期相当の患者のデータ 10 例を対象とし画像解析を行った。実験には、ヒト乾燥下顎骨を Hellman 歯齢各期でそれぞれ 5 個体ずつ用いた。各下顎骨を左右側計測し、計 100 個体と VA 期相当で同意の得られた患者のデータ 10 例について画像解析を行った。顎骨のエックス線撮影は CBCT 撮影装置ファインキューブを使用し、撮影条件は高精細モードで行った。画像解析には高速 3 次元画像解析装置 VPA PLUS (東京) を使用し得られたオトガイ孔から切歯にかけて 1 mm 間隔のパラアキシャル像を取得。これを再構成して前頭断像を得た。得られた各前頭断像について次の項目を計測し、解析・検討を行い以下の結論を得た。

1. 切歯管の形態は始点から終点まで走行していったが明らかな変化はなかった。
2. 切歯管の長さは II C 期までは増加していた。それ以降は大きな変化は認められなかったが IV C 期に増加を認めた。これにより Scammon の臓器発育曲線では一般型を示した。
3. 皮質骨と海綿骨の長さについて歯齢ともに長さが大きくなっていった。皮質骨は値が一定であったが、海綿骨は値の変動が III A 期まで大きくなっていった。この変化は埋伏歯が影響したと考えられる。

論文審査および試験結果の要旨

以上のことから本論文は新しい装置を用い、切歯管の走行出現時期など明らかとなった。この結果によりインプラント埋入など臨床応用に寄与するものと思われた。よって本論文は博士に値すると判断した。論文審査ならび申請者・鈴木達也に対する試験は、2016 年 12 月 14 日に主査奥村泰彦教授および副査渡部茂教授、村本和世教授、坂英樹教授により実施した。主論文の内容に関しては、口頭試問を行い、大学院入学の英語の筆記試験を語学試験とした。その結果いずれも合格とした。よって申請者・鈴木達也は、博士(歯学)の学位を授与されるに値すると判断した。

よって、申請者：鈴木 達也は、博士(歯学)の学位を授与されるに値するものと判断した。